

提出日：2017年5月12日

平成28年度活動助成報告書

東北アジアにおける「市民交流」を通じた平和構築の基盤づくり

報告者：KOREA こどもキャンペーン

## 1：プログラムの目的と背景

現在、東北アジア地域において、課題解決のための対話スキームが膠着し、武力に頼って安全保障上の不安を解消しようとしている流れが顕著になっている。日本においても、近隣国の脅威に対する抑止論が先行している現状において、武力によらない対話の可能性を提示する必要がある。

当キャンペーンは、朝鮮民主主義人民共和国の子どもたちへの人道支援を原点に設立され、人道支援や市民交流などを通して「人と人をつなぐ」ことで、北朝鮮を含めた東北アジア地域における平和構築の土台を築くことを目標としている。

## 2：主な活動内容

今年度は、度重なるミサイル発射実験、核実験の実施など、「平和的ではない」北朝鮮の行動が日本をはじめ世界各国の強い警戒を呼び起こしたこともあり、東北アジア地域において市民交流をひろく行なうに適した環境であったとは言い難い。しかし、当団体が事務局を担う「南北코리아と日本のともだち展」を軸にした子どもの絵画交流、そして5年目を迎えた「日朝の大学生交流」は活発に行なわれた。大学生交流の参加者は、朝鮮だけでなく、韓国を訪問して韓国の学生と出会ったり、大阪での行事に参加して在日韓国人と意見を交換したり、また報告会でその成果を発信するなどして、東北アジアの平和構築に資する市民交流の意義を伝える活動を行なった。

### 1) 「東北アジアの平和構築に資する市民交流」の意義を固める

#### a. 人道支援関係者、交流参加者へのインタビュー、成果と課題の把握。

市民交流とは別に、8月末に朝鮮東北部で発生した洪水の被災地支援に当団体として9年ぶりに取り組んだ。朝鮮赤十字会を通じた支援を行なったため、赤十字をはじめ朝鮮国内で人道支援活動に携わる諸団体との情報交換をおこない、援助関係者と改めてつながりを結ぶことができた。

#### b. 東北アジア地域の歴史的背景を学ぶ学習会の開催。

主に日朝学生交流に参加する学生を対象に、講師を招いて2回の学習会を開催した。

【3-1 参照】

## 2) 市民交流の機会を設けて、参加者、理解者、賛同者を増やす活動

---

- a. 朝鮮・韓国・中国での子ども絵画交流に、日本人や在日コリアンの学生が参加。  
当団体が関わる子ども絵画交流「南北 코리아 と日本のともだち展」の活動の一環として、平壤やソウル、延吉など東北アジア各地を訪問する際に学生が同行し学びを得た。  
平壤においては現地大学生との日朝学生交流を行なった。【3-2 参照】
- b. 日本国内での報告会、展示会、メディアアプローチを通じ市民交流の意義を発信。  
日朝大学生交流について 5 回の報告会やトークイベントを開催し、各回 20~90 名の参加を得た。学生たちによる自主的な報告会も開催された。またそれぞれの行事については随時広報を行ない、新聞掲載、テレビ報道がなされた。【3-3 参照】
- c. 東北アジアもしくは日朝交流に携わる団体からの聞き取り。  
事業についての経験交流を目指したが、十分な情報収集ができなかった。
- d. 日朝交流に関わりたいと考える関係者の発掘。  
日朝大学生交流に関心を持ち、支えたいと考える大学教員との関係づくりを始めた。

## 3) 次年度以降の具体的な計画の立案

---

東北アジア地域での緊張がこれまでになく高まり、朝鮮半島を取り巻く関係各国、特にアメリカや韓国の大統領交代等によって政策も流動的となっている。そのような状況のなかで、情勢分析を丹念に行ないながら、現行事業を継続し、人と人をつなぐ市民交流の意義について説得力をもって伝える方法を更に模索していく必要性を認識した。

## 3 : 助成を受けた活動の報告

---

### 1) 学習会

---

#### ■学習会 1 「朝鮮戦争から見る分断と参戦国、そして日本」

日程：2016年8月17日（水） 講師：金敬黙氏（早稲田大学）

参加者：日朝大学生交流参加者、過去の交流参加者ほか 15 名

概要：朝鮮戦争を切り口に、どのような国が参戦していたのか、日本はどう関わったのか、また世界各国にある「戦争博物館」「平和博物館」において、戦争や平和はどう語られているかをお話しいただいた。

#### ■学習会 2 「在日の個人史から見る日本と朝鮮半島」

日程：2016年8月18日（木） 講師：洪里奈氏（ 코리아 NGO センター）

参加者：日朝大学生交流参加者、過去の交流参加者ほか 12 名

概要：在日三世の講師を迎え、家族史をたどりながら日本と朝鮮半島の歴史、在日コリアンとして日本人の若い世代に伝えたいことなどをお話しいただいた。

## 2) 交流活動

### ■朝鮮民主主義人民共和国・平壤訪問

日程：2016年8月23～30日

参加者：日本人大学生8名（学習院大学、専修大学、国際基督教大学、東京大学、津田塾大学、千葉大学、広島市立大学、熊本県立大学）、平壤外国語大学12名。

日本からは引率者5名、ボランティア、日本語教員、メディアが同行。

概要：平壤外国語大学の学生と、平壤市内で3日間にわたる交流を行なった。2日間にわたる平壤市内見学（中央動物園、綾羅島人民遊園地等）のほか、1日のワークショップを実施し、将来成し遂げたい夢について意見交換をする場とした。交流後、「交流を通じて、お互いが近い国であると思った。朝・日関係の改善は私たち青年にかかっていると思う」（朝鮮側学生）、「日朝関係について複雑な思いを持ってきたが、平壤外大の皆さんは国と国のつきあいではなくて人間同士であると言ってくれ、ハッと気づかされた」（日本側学生）などの感想を交わし合った。

また、滞在期間中を通して2名の平壤外国語大学の学生が通訳として同行したため、小学校での子ども絵画交流や板門店訪問などを通じて、日朝関係、南北の分断と日本のかかわり、安全保障に対する考え方まで多岐にわたるテーマについて同世代と深く話して過ごす時間を持った。

感想より：朝鮮の人々は（自身の出身地である）沖縄のことを深く理解してくださる方が非常に多かったです。翻って、私を含め沖縄の人びとがどうなのかということを考えるのです。私がこれまで朝鮮の問題をどれだけ真剣に考えたことがあるのか。沖縄県民がどれだけ「北朝鮮」と向き合おうとし、理解しようとしているのかと思うと恥ずかしい気持ちを抱かざるをえません。確かに日本のマスメディアからはまともな「北朝鮮」の報道がされませんが、情報化社会の圧倒的な情報量の中から取捨選択をする余地は日本のほうが豊富だと思います。訪朝を経験した私たちがその判断材料の一つとしてでも提供する役割を担っていかなくてはならないと思います。



ワークショップで意見交換する日本人学生と平壤外大生



市内見学をしながら交流を深める（綾羅島人民遊園地内）

### ■中華人民共和国・延吉訪問

日程：2016年10月14～17日

参加者：絵画交流過去参加者(在日)・大学生交流過去参加者(日本人)2名、引率者4名。

概要：「南北 코리아 と日本のともだち展」実施パートナーである延吉市少年児童図書館に依頼し、延吉市の小学生向け絵画ワークショップを実施するために渡航した。小中学生時代に「ともだち展」に参加経験がある在日コリアンの大学生らが同行して活動を補助した。

滞在期間中は、中朝国境にあたる図們市を訪れ、豆満江をはさんで対岸の北朝鮮をのぞんだ。大きな洪水被害があった直後で、復旧活動に出ている朝鮮の人々の姿を目にした。また、朝鮮半島からの入植者が入ったり、日本が間島日本総領事館を置くなど、東アジアの人々が多く交錯した龍井市も訪問し、中国・朝鮮・日本をまたぐ歴史について学んだ。

感想より：延吉訪問ではワークショップに参加するだけに留まらず、観光したり、共に訪問したメンバーとおしゃべりしたりと楽しい思い出が沢山できました。また同時に様々な経験をさせて頂く中で、「自分のルーツを知り、同胞（コリアン）を取り巻く環境に対する問題意識を持つこと」の大切さを改めて感じました。この訪問がなければ異国で暮らす同胞たちの存在や生き方を、今も知らずにいたはずです。これらに気付けたことも含めて、この訪問は私にとって得難い体験になりました。



延吉の子どもたちの凧作りワークショップを手伝う学生



中朝国境を流れる豆満江を背に

## ■大韓民国・ソウル訪問

日程：2016年11月3～6日

訪問メンバー：大学生5名、ボランティア・引率者3名

概要：「南北 코리아 と日本のともだち展」実施パートナーである社団法人オリニオッケドム（肩を組む友人の意）が平和教育センターを開設するにあたり、記念シンポジウムが開催された。この機会にスタッフが招へいを受け、日朝韓の市民交流について紹介を行なうと同時に、平壤訪問に参加した学生5名が訪朝体験を話す機会を得た。

滞在期間中、大学生は韓国側から板門店を訪問したほか、韓国の大学生とともに、多文化の街・安山や、大きな社会問題となったセウォル号事件の焼香所、韓国の大学などを訪問して、韓国の現在を知り、同世代と語る時間をもった。この場には日本から、過去の交流参加者（大学生）も自主的に合流した。

感想より：日本国内において、メディアを通じた韓国の様子のみを見てみると、どうしてもデモ、とりわけ反日デモの印象が強く、感情的な国、といったようなイメージを持ちやすくなる。しかし、朝鮮訪問の際にも感じたが、国家と国民を同一視すること、また一律化された「国民性」のイメージにとらわれてしまうことは、相手に対して盲目的になってしまいとても危険なことだ。だからこそ、こうして静かな対話を行える状況に身を置くことができたのは本当に幸運なことだと感じた。



オリニオックドム主催のレセプションにおいて、訪朝経験を発表する学生たち



韓国の大学生とともに安山市の多文化子ども図書館を見学

### 3) 報告会

#### ■訪朝報告会・1：ともだち展、大学生交流、そして洪水被害

日時：2016年9月26日（月）18:30～20:00

場所：デジタルナレッジ ラーニングカフェ（東京都台東区）

発表者：事務局担当者3名（筒井、寺西、井上）

来場者：30名

#### ■訪朝報告会・2：日朝大学生交流

日時：2016年11月27日（日）14:00～16:00

場所：日本国際ボランティアセンター東京事務所（東京都台東区）

発表者：日朝学生交流参加大学生5名

来場者：33名

#### ■訪朝報告会・3：日朝大学生交流

日時：2016年12月18日（日）14:00～16:00

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区）

発表者：日朝学生交流参加大学生3名

来場者：18名

※このほかにも、学生が自主的に報告会を開催した（10/29 横浜など）。



9/26 実施の報告会の様子



11/27 実施の報告会の様子

■ともだち展トーク「ピョンヤンでの出会い～大学生が見て触れて感じた『北朝鮮』」

日時：2016年12月18日（日）14:00～16:00

場所：大阪国際交流センター（大阪府大阪市天王寺区）

発表者：日朝学生交流参加大学生3名

来場者：約60名

概要：大阪で開催された「南北 코리아 と日本のともだち展」の同時開催イベントとして、8月に訪朝した大学生が報告をおこなった。事前に新聞記事に掲載されたこともあってか多くの参加があった。朝鮮の状況や平壤の学生の言葉を伝えたことで、来場者からは「このような交流ができていることに驚いた」「厳しい時代だからこそ、これを契機に関係改善の一步を踏み出してほしい」といった声が聞かれた一方で、在日コリアンの若い世代からは「(東アジアにおける課題を)日本人である自分自身の問題としてとらえることができるようになったのか」「日本に戻ってきてからどんな実践をしているか」との指摘・質問も出た。



大阪展トークイベント



多くの来場があった

■トークイベント「私たちの出会った平壤の大学生～5年間の出会いを積み重ねて」

日程：2017年2月18日（土）15:00～17:00

場所：アーツ千代田 3331（東京都千代田区）

発表者：日朝学生交流参加大学生5名

来場者：約 90 名

概要：東京で開催された「南北코리아と日本のともだち展」の同時開催イベントとして、2012年の日朝大学生交流スタート時から本年までの歴代の参加者5名をスピーカーに、これまでの経緯を振り返るトークイベントを実施した。「南に行くことのできない平壤の学生と板門店を訪問し、南北分断や日本の植民地支配が歴史ではなく現在の問題であると実感した」という学びや、「ここまで続けてきたからこそ（表面的な交流ではなく）、互いに壁も感じるようになっていたが、次に何をするか約束しあえる関係を築けていることが大きな進化だ」といった発言が、来場者に深い印象を残した。このイベントには首都圏だけでなく、大阪、広島、福岡、熊本、沖縄などからも参加があったほか、在日朝鮮人、在日韓国人、台湾人留学生、韓国人留学生、中国朝鮮族、韓国人など、幅広く多様な層が集まる場となった。当団体として韓国のパートナー団体・オリニオックドムでボランティアをする大学生2名を招へいし、絵画展で活動プレゼンテーションを行なってもらったほか、トークイベントに参加した。韓国人学生の感想より：二日目の午後、日本の大学生が平壤の日本語学科と大学生と交流した経験を発表する時間がありました。そのなかで、もっとも印象的だった言葉があります。「私には軍人になりたいという北のともだちと、入隊している南のともだちがいます。もし戦争になったら、この二人のともだちが、互いに銃を向け合うのかと思ったら、すごく耐えられない気持ちになりました」。一瞬、呆然となりました。ともだち…そうです。わたしたちが無関心だった、もしくは憎み、恨んでいる彼らは、誰かにとっては「ともだち」なのです。また会おうという約束を守るために、昼夜なく勉強する原動力となってくれる友人の存在。国家と理念を超えて寄り添えるのは、まさに友人だからなのです。



東京展トークイベント



幅広く多様な層が集まる場となった

## 4：活動の成果

### 1) 平和構築につながる「市民交流」の可能性をひろく提示できた

朝鮮半島を中心に東北アジア地域の情勢が緊迫し、同地域での対話の可能性について多くの人が悲観的・懐疑的になるなかで、実際に各地域を訪問して市民交流を通じた対話の

事例を積み上げることができた。またその事例を報告会、メディアへの記事掲載・テレビ番組報道などを通じて知らせることができた。

東北アジア地域の問題は政治的枠組みのなかで語られがちであり、またその影響が大きいことも否めないが、市民として平和構築に寄与する一手段を提示することができたと考ええる。

2) 幅広い関心を持つ学生の参加により、新たな層へのアプローチが可能となった

今回の大学生交流には、朝鮮半島や東アジア地域だけでなく、安全保障、歴史、言語とアイデンティティなど、多様な関心を持つ学生が集った。この学生たちにつながる若手世代が本事業を通じて出会い、意見交換を行うことができた。

朝鮮民主主義人民共和国は、同地域の平和構築を考えるうえで外すことのできないプレイヤーであると同時に、核保有、歴史認識、沖縄の基地問題、在日朝鮮人の人権等、様々な課題に相関関係を持っている。同国を訪問した学生たちが、「対話のできる友人ができた」と述べているように、北朝鮮を難しい相手と避けるのではなく、対話の可能な相手として認める姿勢を広げることにつながったと認識している。

## 5：今後の課題

当初計画では、市民交流事業を実施すると同時に、東北アジア地域で市民交流を行なっている事例を収集することで、平和構築につながる多様な方法を考えることを目指していた。厳しい情勢下において、事例収集よりも、交流を円滑に実施すること、それを効果的に広報することに注力し、大学生交流で新たな繋がりを生むことができた。こうした学生・若手世代への広がりは今後もよいエネルギーを生むと考えられ、その流れをどう後押しし、また活用していけるかが鍵になる。

朝鮮半島情勢が緊迫の度合いを増していることばかりが大きく報道される昨今、学生交流の事例を紹介するだけでも「こんなことが可能なのか」と肯定的に受け止められる向きもあり、現在も市民交流が可能であることを知らせ続ける意義は大きい。現行事業を地道に継続・発信するなかから、より効果的・実質的な活動を見極めることが肝要と言える。

ただ、市民交流に対しては「これは一部の人にしかできないもの」という反応も少なくない。情勢のさらなる悪化によって、特に北朝鮮を含めた交流自体が困難になった場合、「平和構築」に資する活動を続けるために、これまでの人的ネットワークをどれだけ生かすことができるか、また、交流以外の手段についてもあわせて模索していく必要がある。

また、上記活動を続けるにあたって、運営体制の整備（関わる人材）と資金獲得の計画は大きな課題である。運営体制に見合った事業規模についても引き続き検討して結論を見出すことは、最も優先度の高い事項である。

以上